

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



地震からの津波対応「避難訓練」しました!



●東日本大震災の教訓は、確実に今も生きていて、避難訓練のあり方を大きく変えてくれました。
 ●我が身にも起こるかも知れない。そして起こった時には、瞬時の判断一つで命を落とすかも知れないことを、私たち大人はリアルにイメージできます。
 ●大人の必死さは、ちゃんと幼い子どもにも伝わります。避難先で誰一人私語をしませんでした。

●最低でも10m以上の高さは確保したいため、3歳児の力を鑑みて直近のビルである中学校の4階に避難することにしています。



●子どもたちの防災リュックは中学校の4階倉庫に置いてあります。
 ●新入園児は初めての訓練でしたが、事前指導を丁寧に行っていたのでとても落ち着いてできました。

●もし、本当に起こったら・・・、交通網は寸断され、子どものお迎えにも、簡単には来られないことが予想されます。
 ●おうちの人を待つ間、子どもたちはパニックにならず、じっと我慢しているのでしょうか？
 ●地震・津波は、夜起こるかもしれません。各家庭でも、危険地域にお住まいの方は、避難先を話して決めておきましょう。



私を育ててくれたもの(その1)

これは、一昨年のPTA広報誌「あしあと」に寄稿したものを一部手直ししたものです。(連載)

私は、幼い頃、誰が、どこでどのよう育ててくれたのだろうか？

こんな問いかけを自らにすることになったのは、幼稚園に赴任することになったからに他なりません。「三つ子の魂百まで」とよく言いますが、幼児期の教育がいかに大切で、その子の人生さえも左右するものであるかということを知り、ならば、私自身は、どのようにしてその大事な幼児期を過ごしてきたのだろうかと考えずにいられなくなりました。

私は、両親共働きで、まだ四十代後半だった働き盛りの祖父母に育てられました。祖父母は専業農家。田や畑、牛を飼ったり椎茸を作ったりと多角的な農業で、それはそれは忙しく働いていました。私は、就学前の一年間は町立の幼稚園に通いましたが、それまではずっと、祖父母の傍ら、つまり田や畑で毎日過ごしていたそうです。

幼児は「遊び」を通して学んでいると言います。では私はその時、いったい何を遊んで、何を学んでいたのでしょうか？

殆ど一人遊びだったはずですが。だから、遊び場は田や畑、山や川。遊び相手は、木々や草花、昆虫の類い。BGMは鳥や蝉の鳴き声。全ての遊びは自分から働きかけなければ、何も返ってはこない自然が相手です。ただ、間違いなく言えることは、その豊かな自然にじっくりと関わる「時間と自由」が与えられていたということだと思います。小さな私は、ゆったりと流れる時間の中で自由に遊んで、きつと色々なことを学んでいたのだらうと思います。(つづく)

